

SAARC 諸国文化交流：バングラデシュの事例から

高 田 峰 夫

(受付 2002 年 10 月 11 日)

0. は じ め に

本稿では、バングラデシュ国における文化交流事業の枠組み、同国と他の南アジア地域協力連合 (SAARC) 域内諸国との文化交流事業の実態、同国における諸外国文化センターの活動、同国における日本文化紹介事業の現状と課題等について、報告を行う¹⁾。この報告は、筆者がバングラデシュ国内で多方面の人々に聞き取り調査を行って得た情報を中心にして、それに現地で入手した各種資料及び現地の消息通の情報を若干加味し、まとめたものである。聞き取り調査に協力いただいた方々の一覧は本文末に一覧で表示した。これらの方々の協力に感謝したい。

1. バングラデシュにおける文化交流の枠組み：

SAARC 域内との関係を中心に

バングラデシュにおける SAARC 諸国を中心とした諸外国との文化交流の実情に目を向ける前に、バングラデシュ政府が文化交流事業に対してど

1) 本稿は、外務省の外郭団体である国際問題研究所からの委託を受け実施した、南アジア諸国全域を対象とする共同研究の一部を成す。研究終了後は直ちに報告書を作成し、同研究所から公刊する予定であったが、研究代表の都合により、今のところ報告書の刊行には至っていない。しかし、バングラデシュにおける状況が急激に変化していること、また同国における日本文化広報活動等の必要性を鑑み、研究代表の許可を得た上で、このような形で公表することになった。今後同報告書が刊行される場合には、バングラデシュに関してほぼ同一内容の報告がなされることを、ここに明記しておく。なお、調査の実施時期は2000年末から2001年3月である。

のような基本姿勢で臨み、そのために具体的にはどのような政策を打ち出しているのか、これらの点を確認しておく²⁾。

(1) バングラデシュ政府関係者の見解

外務省関係から概観してみる。初めに文化交流事業について政策ないし全般的な方針についてたずねたところ、明言が避けられた。そこで SAARC 諸国間の文化交流に限定して聞き取りを行った。文化交流の枠組みとしては、“SAARC Audio Visual Exchange” (SAVE) がすぐさま挙げられた。これは、SAARC 加盟諸国間で、テレビ、ラジオ、映画等の分野での交流を行うスキームであるとのこと。また、若干の教育交流プログラムが“SAARC Chair and Fellowship Scheme”の下で実施されているが、これはあくまで学術的なものに限定されており、狭義の文化交流事業とは言えないようである。外務省が把握している限りでは、SAVE 以外の具体的な交流の枠組みは、ないとのことである。青年スポーツ省所轄では人的資源開発 (Human Resource Development) の一貫として若干の交流があるが、基本的には文化交流と言えるものではないようである。

なお、特に最近の状況に関して、1999年度と2000年度には、印パの核実験に始まる印パ関係の急激な悪化の影響を受け、事実上 SARRC の枠組み自体が半凍結状態にあり、そのためにこの2年間には SARRC 全体として文化交流面で動きと言えるようなものはほぼ皆無であること、また、文化交流事業実現のための枠組み作りや、その下準備としての話し合いも皆無であるとの認識が示された。今後は改善されるだろうとの見込みも示されたが、あくまでそうなって欲しいとの「期待」にすぎないようである。

2) バングラデシュでは、諸外国にも増して省庁の権限が強く、なおかつその中で秘密主義がまかり通る状況にある。そのため、複数の関係者に確認してもなお、省庁が直接・間接に関わる事業や計画に関しては、その実態が判明しないことがあった。以下で行なう記述は、一部曖昧なままに留まっているが、以上のような事情を考慮し、了承されたい。

外交上の枠組みを超えて、より具体的な対応を担当するのは、文化省である。同省 SAARC 担当部局での話しを要約すると以下の通りである。政策や全般的方針については外務省が把握しているはずだから、そちらに当るべきであるとの主張が最初になされた上で、SAARC 諸国のうち、文化交流協定に関しては、インド、パキスタン、ネパール、ブータン、スリランカとは協定を締結しているが、モルディヴとの間では未締結である。具体的な交流の内容については、文化交流協定に基づき交流を行っているが、基本的には2国間での交流に限定されている。その内容は全て記録に保存してあるが、通常は部外秘にしているとの主張であった。ただし、話しの端々から窺った限り、本当のところ一体どの程度まで把握しているのか、疑念が残ったことを正直に記しておく。記録されない民間での交流は多いようだ、との言及があったことは、そうした疑念を強めるものになった。「南アジア文化センター」については、聞いたような気もするがそれがどのようなものか全く知らない、との意外な答えがあったことも付記する。

同省とも関係の深い実務担当機関のシルポコラ（芸術）・アカデミーでは、「南アジア文化センター」の建設について、それがどこになるのかは知らないが、そのような話があることは聞いているし、また、それに対して特に反対はしない、との極めて消極的な反応を得た。その理由を探ってみたところ、明言は避けられたが、SAARC 本部を誘致しようとしてバングラデシュが動いた際にインドが反対したため結局ネパールになったという過去の経緯への言及があった。このことを考えると、暗にだが、インドの影響力が大きく働く国に、新たにその種の施設を作ることには後ろ向きである姿勢を表明したものと思われる。

以上をまとめると次のように言えよう。

- ①バングラデシュ政府部内では文化交流全般についての政策ないし方針は策定されているようには見えない。
- ②SAARC 諸国との文化交流については文化交流協定が締結されており、そ

れに基づいて若干の交流がなされているが、政府省庁が把握する限り、それらは極めて限定的である。

- ③他方、政府省庁が把握している範囲を超えて、バングラデシュ民間と他の SAARC 域内諸国との文化交流事業の実態はもう少し活発であるらしい。
- ④「南アジア文化センター」については、ほとんど議論がなされていないのみならず、一部には消極的な態度が見受けられる。そもそも SAARC そのものについて、それが現在まともに機能していないとの認識を、積極的にであれ消極的にであれ、ほぼ全ての関係者が共有していたこと、にもかかわらず、文化交流事業の側面に限定してであれ、SAARC の枠組みを何とか機能させようとする意欲が全く感じられず、むしろ冷めた態度がほぼ共通して見られたこと、これらが印象的であった。

(2) 政府関係者以外の見方

同国の代表的な日刊紙編集者の話によれば、バングラデシュ国内の文化政策について、少なくとも彼が知る限り、これまで政府でも省庁でも法律や規則で明確に定めた文化政策は一切存在しない、とのことである。また、文化交流についての政策も存在しない、という。個々の問題、例えば国語であるベンガル語の重要性や伝統文化の維持等については、しばしば言及されるが、包括的な文化政策は全くないのが現状だとのこと。こうした理解は、先の政府関係者の話しを裏書するものである。

それでは、どのような理由により、文化政策及び文化交流政策が策定されてこなかったのでしょうか。彼が推測するところでは、誰もそのようなものの必要性を主張しなかったからであろうし、さらに言えば、この国の政治家にも官僚にもそうした問題に関する関心が欠如しているからであろう、とのこと。政治家は自分たちの利害に関わる問題や自分の支持者や取り巻きの利権には敏感だが、それ以外の問題にはほとんど関心を払わないし、官僚は保身のためと自分の利益にならないことへの無関心とのため、こうした問題には当該部局であれ全く手を着けようとしないのだ、との説明

である。結局、文化政策等が必要なことは言うまでもないが、このような状況下では今後当分の間、文化政策が制定される見込みはないと言わざるを得ない、との判断であった。こうした判断は、筆者が政府関係者に対して聞き取り調査を行った際に彼らが示した対応を見る限り、残念ではあるが、正しいと認めざるをえないようである。

2. バングラデシュにおける SAARC 諸国との文化交流の実態

(1) 政府関係者の話から

外務省 SAARC 局では文化交流の枠組みにのみ関与していて、その実態の把握はほとんどできていなかった。それに対して、文化省の SAARC 担当部局からは、当初情報提供を拒否されたが、数度に渡る交渉の結果、過去 5 年間の文化使節団の往来について、ごく簡単なリストを入手した³⁾。それによれば、バングラデシュから他の SAARC 諸国への文化使節団派遣は過去 5 年間で 13 団体に上るのに対して、他の SAARC 諸国からバングラデシュへの文化交流使節団の来訪はわずかに 3 団体に留まっている。しかも、1996 年から 1998 年の 3 年間には毎年各 1 団体が来訪していたのに対し、1999 年と 2000 年にバングラデシュを来訪した団体は皆無である。これは、部分的には 1999 年に発生した印パ間の核危機の影響であろう。しかし、バングラデシュ側から他の諸国への使節団派遣が 1996 年に 4 団体、1997 年に 3 団体、1998 年に 2 団体、1999 年に 3 団体、2000 年途中の記録集計段階までに 1 団体と、比較的にコンスタントな派遣実績を示しているのとは対比してみると、極めて対照的な結果となっている。これがどのような理由によるものか、必ずしも明らかにはならなかったが、記録の不備や偏りの可能性があることも考慮しても、奇妙な状況と言わねばなるまい。なお、訪問先としては、インドへ 8 回、ブータンへ 2 回、パキスタン、ネパール、スリ・ランカへ各 1 回となっており、圧倒的にインドへの偏りが目立つ。他方、バ

3) 入手経緯の問題から、ここではあえて提示しないことをお断りしておく。

ングラデシュを来訪した団体の国別では、インドが2回、パキスタンが1回となっている。

バングラデシュにおいて省庁レベル以下で文化交流事業を実務担当する機関として、最も代表的なのはシルポコラ (芸術)・アカデミーである。ところが、同アカデミーでは意外な反応に出会った。同アカデミーの見解では、SAARC 諸国内での文化交流と言っても、そもそも SAARC 自体がほとんど無効 (almost ineffective) になっている。それゆえ、その枠組みでの文化交流といっても限度がある、とのこと。なお、具体的には、毎年1回、各国から使節団がバングラデシュにやってきており、逆にバングラデシュ側からも各国にそれぞれ文化交流使節団を派遣しているが、それ以上ではない、との主張もあった。しかし、これはあくまでも同アカデミーが直接管掌する範囲内のことであると考えられる。なぜなら、先に文化省から得た情報だけに限定しても、インドに向けては単年度で複数の文化交流使節団が派遣されているからである。ただし、具体的にどのような使節団が派遣され、また来訪しているのか、との問いに対しては、複数回にわたり同アカデミーを訪問して資料提供を求めたものの、回答は得られなかった。そのため、果たしてどこまでこの回答が実態を反映したものであるのか、判断は保留せざるを得ない。

(2) 民間の文化交流事業関係者の話し：部門別に

政府関係者からの聴取結果を見る限り、バングラデシュと他の SAARC 諸国との間の文化交流は、きわめて限定的かつ不活発に見えてしまう。しかし、政府関係者以外からの聞き取り調査の結果と、筆者が現地のベンガル語及び英語の新聞雑誌等で見かける報道等を総合すると、実態はかなり異なるようである。

(a) 全体の概況

初めに、同国の新聞編集者の話しを中心に、同国における文化交流の概況を見てみよう。彼によれば、各分野の中で演劇はかなり良い状態に

ある、とのことである。国際的に見ても同国の演劇界の水準は元々ある程度高く、交流もインドとの間ばかりでなく、各種国際演劇祭への参加、外国からの招請・公演等、まあまあ良好のようである。事実、ベンガル語紙文化欄では連日のように各種の演劇公演の紹介記事があり、その中にはインドの劇団の公演も含まれていることからすれば、この評価は正しいようである⁴⁾。

同編集者の言では、演劇に次いでいるのは舞踊と音楽で、特に伝統的な音楽は交流が認められる、とのことである。それに対し、映画は、ごく例外的なものを除けば、正直に言って国内で製作される作品の大部分がヒンディー・シネマの物まねであり、そのために海外に出ることはほとんどない、とのこと。他方、インドの映画は洪水のような状態でバングラデシュに流れ込んでいるが、これは両者の質の差を考えればやむを得ないだろう、というのである。それでは、以下、分野別に少し詳しく見てみよう。

(b) 映画

映画に関しては、バングラデシュ映画界の中心人物である女性からの聞き取り結果を基にまとめた。それによると、バングラデシュの国内に映画に関する特定の法律はなく、明確な方針もない、とのことである。ただし、映画倫理規定その他いくつかの規定があり、それに基づき検閲は行われている。バングラデシュ国内で上映される物については、商業ベースの物だけでなく、各国の文化センターが上映するものも含めて、基本的には全て検閲委員会が検閲している、という。

SAARC 諸国との間の交流は、各国の団体と連携して、映画祭などの形で交流するのが主なもののようである。その際には、上映作品の提供、

4) 演劇関係者に直接聞き取りする機会を得られなかったため、バングラデシュ国外で同国の劇団がどのような活動をし、どのように評価されているか、これらについては確認できなかった。そのため、演劇に関しては個別の項目を立てていない。

上映会への参加、セミナーへのパネリストとしての参加等が主な活動になる。こうした映画祭などの数はそれほど多いとは言えないが、それでも各国との間で交流はある。また、稀にだが、共同製作の形で複数の国の団体が共同して作品を作り上げ、それぞれの国で公開することもある、とのこと。

2001年1月末から2月初旬にかけて、バングラデシュでは初の試みになる「2001年バングラデシュ映画祭」が開催された。同映画祭の委員長であった彼女の言によると、この映画祭には、16カ国、合計57作品が出品され、その中にはインド、スリ・ランカ、パキスタンの SAARC 諸国以外にも、中国、日本、イギリス、ドイツ、イラン等からの出品作が多数含まれていた。それらの作品を首都ダッカ市内19の映画館と、一部はラッシャヒ及びクルナの映画館で上映された。通常、一般の商業的上映では圧倒的にバングラデシュ映画に偏っており、一部ではインド映画、アメリカ映画、香港映画などが上映されているものの、それ以外の国の映画、それもシリアスな映画の上映機会は、各国の文化センターなどが行うものに限定されている。今回の映画祭では、一般の映画館を使った上映の方針を採ったため、多数の観客が見ることが出来た。推定では延べ40～50万人が見たことになる。これほどの機会はこれまでなかった、とのこと。各国の映画の中では、社会階層により好評だった映画に違いがあった。アッパー・クラスの人々には普段見る機会が少ない欧米や中国、日本、イランなどの映画が好評だったが、一般の人々には圧倒的にインド映画が受けていた。地域的にバングラデシュと若干の共通性がある上に、歌ありダンスありで、なおかつ分かりやすいストーリー運びなのが好評の原因だろう。これはコマーシャルと言うのではなく、むしろ「ポピュラー」だと評価するべきである、とのことであった。

今回の映画祭は、実際、同国における文化交流の試みとしてもバングラデシュの映画界としても画期的な出来事であったのは間違いない。また、映画祭を中心に交流が試みられていることも事実であろう。しかし、

この説明ではあまりに楽観的に過ぎるようである。

確かに町の映画館では圧倒的に多くバングラデシュの娯楽映画が上映されているが、それらは国外の映画祭などで上映されることはない。その理由は、先に概況の項で新聞編集者の言にあったように、バングラデシュの娯楽映画がいわゆるヒンディー・シネマの拙劣な模倣であり、国外で評価されるものとは程遠いからである。他方、一部には例外的に「芸術」映画もあることは確かだが、それは国内では上映の場さえほとんどないのが実状である。したがって、映画祭を中心にした文化交流とは言っても、それには限度がある。

同時に、彼女の説明でスッポリ抜け落ちているものに、テレビ、ビデオの問題がある。テレビについては次の項に譲り、ビデオについてだけ簡単に触れておく。今日のバングラデシュでは、かなりの村部でもレンタル・ビデオ店がある。それらの店では、バングラデシュの娯楽映画以上に、ヒンディー・シネマのテープが多数揃えられており、いかに人々の需要が多いか分かる。電気さえない村でも、有志の持ち寄りで資金を作り、ビデオ店からテープのみならずテレビとビデオ・デッキ、バッテリーまでセットで借り、若干の料金を徴収して特設映画上映会が開かれることも間々ある。こうした場面まで考慮に入れば、ヒンディー・シネマの影響力は多大なものがあり、草の根での文化交流の実態としては無視できない要素になっていると言えるであろう。

(c) テレビ

テレビについては、複数の発言を基にまとめる。バングラデシュのベンガル語放送は、現在、「国営バングラデシュ・テレビ」(BTV)、「エクシェイ・テレビ」(ETV)、「アジア・テレヴィジョン・ネットワーク」(ATN)、「チャンネル・アイ」(Channeli) の4つある⁵⁾。このうち地上波

5) 2002年8月に、ETVは放送免許取得プロセスに問題があったとされ、閉局されてしまった。これは明らかに2001年に行なわれた総選挙の結果、与野党が攻守交替し、ETVに批判的な連立与党が登場したことによる政治的余波である。閉局が

は BTV のみで、他は衛星放送である。また、ニュース等まで全て備えているのは BTV と ETV だけであり、この 2 局は全て国内製作かつ国内で発信している。残り 2 局は、専らエンターテインメント番組のみを放送し、制作は国内で行っているが、ビデオをシンガポールに送り、そこから放送する形をとっている。他方、インドで製作・放送されるベンガル語チャンネルでバングラデシュでも受信可能なのは、衛星放送に限られ、(インドの)「ETV-Bangla」,「ATN」等 4 局ある。ただ、意外なようだが、これらの放送は、それほど多くは見られていないようである。同じベンガル語ではあってもその中での方言差があること、宗教を中心とした習慣の違いが反映されて違和感があるため、さらには宗教の違いから祝祭日が異なること等が主な原因のようである。

むしろ文化交流の視点からすれば、インドの放送ではヒンディー語放送に注目すべきようである。映画館に行かなくとも気楽にヒンディー・シネマが見られるため、多数の視聴者の関心が集まり、常に一定の視聴者を確保しているようである。また、スポーツ、特にバングラデシュの人々が好きなクリケットの試合を多数放送する「スター・スポーツ」は、若者を中心に人気がある。

都市や都市近郊の視聴者は、ケーブルを使った衛星放送で ETV, チャンネル・アイ, ATN, ヒンディー語放送等を見ている割合が圧倒的に高いが、村部ではまだ圧倒的に多くの人が BTV を見ているようである。そうした地域では、先に言及したビデオを通じた文化交流が重要な意味を持つと言って良いようである。

(d) 音楽

音楽については極めて憂慮すべき事態が生じている。ごく一部の古典音楽演奏家がバングラデシュの国外で演奏活動を行うこともあれば、逆にバングラデシュで国外(専らインド)の音楽家が公演を行うこともあ

→ 一時的なものになるのか、ほぼ永続的なものになるのか、現時点では判断が困難である。それゆえ、ここではそれ以前の状況をそのまま記すことにした。

る。しかし、それらは規模としてはきわめて小さいものである。また、近年ではロック・ポップ等のバンド音楽が盛んになり、都市部を中心に若者の人気を集めている。しかし、規模の点ではまだまだ限定的である。それに対して、圧倒的に多数の人々にとって、最も身近な音楽との接触はカセット・テープによるものであり、最近ではそれに CD が加わっている。ところが、これらの分野は他の国とはかけ離れた特殊な状況にあるようだ。同国で著作権を何とか普及・定着させようと努力している音楽関係者の言葉を基に現状を概観しよう。

バングラデシュにおいて、音楽関係で国内活動、国外との交流を規制する法律や規則は一切ないそうである。そもそもバングラデシュの現行法規には国内のアーティストの作品を別の会社がコピーすることを禁じた法律だけしかなく、しかもその法律さえもほとんど実効性を持っていないという。そのためにいわゆる「海賊版」は完全な野放し状態と言える。この事実を踏まえないと、バングラデシュにおける諸外国との音楽分野における文化交流は理解できないだろう、とのこと。

国際著作権協会に加盟する彼が経営する社を除き、バングラデシュにおけるレコード会社や流通販売店は残らず海賊版行為に関わっていると言って良いらしい。そのために、国外、特にインドからのカセット、CD が大量に海賊版として市場に出回り、文化交流ではなく「文化的独占状態」をバングラデシュ国内に生み出している。確かにインドの音楽は古典音楽から映画音楽を中心とする現代的なポップまで実にバラエティに富んでおり、また実際に魅力的でもある。しかも、海賊版は製造原価が極めて安く済み、正規の流通ルートを通らないので一切税金はかからないから、利幅は大きい。原価と流通コストが安い場合オリジナルの場合に比べて小売価格は $1/4 \sim 1/3$ であり、消費者は若干音質が悪くても海賊版の方を買う。したがって売上は、事実上海賊版の独占状態となる。巨額の利益の一部でインドからさらに新しい作品のオリジナルを仕入れ、それで新たに海賊版を作る。目新しい作品だから、消費者は一層そちら

に引きつけられるわけで、市場がインドの音楽カセットや CD にほぼ独占されるのも当然だ、とのことである。

現に、ダッカに限らず、バングラデシュ国内の音楽テープ店をのぞいてみると、どこでも大量の海賊版を目にする。と言うよりも、CD などの場合には、オリジナルを 1 枚探すためには多くの店を回ってみなければならないような状況が生じているのは筆者も体験済みである。一部には欧米音楽の海賊版も見られるが、ポップスから古典までジャンルを問わず、圧倒的に多数を占めるのは確かにインド音楽である。また、町を歩いていても、しばしば耳にするのはインドの映画音楽である。どうやらこの分野では、古典音楽などの象徴的な例を除き、文化交流の段階はすでに通りすぎてしまったように思える。

(e) 舞踏

概況の項で記した通り、表面上確かにバングラデシュでは舞踏が盛んであるが、文化交流の側面から見ると、単純に肯定的評価はできないようである。特に、その質と国外での公演状況や評価という点になると、疑問が生ずる。本稿末尾の一覧にはあえて含めなかったが、バングラデシュの舞踏関係者自身の言によれば、基本的にはバングラデシュの舞踏は古典舞踏とベンガル・ダンスと呼ばれる 2 種になり、いわゆる現代舞踏はほとんど存在しない。しかも、古典舞踏はインドの古典舞踏の亜流であり、舞踏関係者もプロ・クラスを目指す人はほぼ例外なくインドで学んでいる。したがって、学習という意味では交流があるが、それ以上の交流はないに等しい、とのことである。他方、ベンガル・ダンスは、古典舞踏が習得困難かつ難解であるために、それを簡単にアレンジして土着の踊りと融合させたものであり、目を楽しませるものではあっても芸術とはとても言えない (一部の専門家は「お遊戯」と酷評する)。したがって、それを国外で公演することは極めて稀である、とのこと。この評価はかなり厳しいようだが、新聞報道などでも、演劇に関する報道が正規の「公演」中心であるのに対し、舞踏の場合はバングラデシュで言

う「オヌスタン」(セレモニー的な場)で行われたものの報道が大部分を占めていることを考えると、むしろこうした評価の方が実状に近いようである。

(3) インド高等弁務官事務所 (HI) の活動

SAARC 諸国の中で、バングラデシュ国内におけるインドの存在感は圧倒的なものがあるが、文化交流の面でも同様なことが言える。すでにこれまでの記述でもそれは十分明らかであろうが、さらに見逃せないのがインド高等弁務官事務所の活動とその影響力である。ここでは、同事務所参事官の話しを基に、それを概観しておく。

一般的に文化交流授業は重要であるとインド政府は常々考えているが、バングラデシュとの間には、他とは異なる特別の事情があることは認めなければならない、とのこと。すなわち、インドの西ベンガル州を中心にした地域とその住人たちとバングラデシュは、言語、歴史、伝統、文学等々の多くの面で共通するものがあり、そのために他の諸国に比べて文化交流がより一層の重要性を持つ、というのである。

具体的な文化交流は、大きくいくつかの側面に分かれる。まず、インドからの文化使節団であり、舞踊、音楽等々が中心だが、毎年平均して10グループ前後が政府レベルでバングラデシュを訪問し、公演を行う。ただし、これはあくまでHIが主催している数であって、この他に大小合わせると例年何百ものグループがこちらの文化・芸術団体の招きでバングラデシュを訪れ、公演・交流を行っているが、その具体的な数や状況については把握していない、とのことである。

日常的な活動拠点となるのが、「文化センター」と高等弁務官事務所隣接のオーディトリウムである。文化センターは市の西部にあり、図書館、読書室、アート・ギャラリー、オーディトリウムからなっている。図書館には現在約2万冊の本があるが、インド側で出版されたベンガル語図書と英語図書がほとんどとのこと。蔵書数が増えたことと利用者の便宜を考え、別

に読書室が設けられており、利用は自由。アート・ギャラリーとオーディトリウムは一般開放されていて、事前に申し込み許可を得れば誰でも利用できる。他方、事務所隣接オーディトリウムでは、毎月15回前後インドの映画を上映していて、映画ファンが多数訪れている、という。

ただし、予算や人員の制約もあり、広報活動は限定されている、とのこと。雑誌を昨年までは隔月、今年からは月刊で出しているが、これはもっぱら文学関係に限定されたものである。映画上映や公演についてのプログラムやパンフレットは作成できず、情報提供はもっぱらプレス・リリースや招待状送付によって行っているようである。HIの文化部には文化センターと事務所とを合わせて常時11～12名が在籍しているが、留学関係の仕事も多いために、活動に制約があるのが悩みだとのことであった。

バングラデシュの学生や知識人にHIの活動は良く知られており、施設の利用経験者や主催行事への参加経験者も多い。市場を通じたポピュラー文化面での圧倒的な影響力に加え、HIのいわゆるハイ・カルチャー面での活動は、バングラデシュ国内における文化面でのインドの圧倒的な存在感を生み出す大きな要因になっているようである。

3. バングラデシュにおける SAARC 諸国との文化交流の問題点

(1) 政府関係者の話し

外務省関係からは、SAARC 域内での文化交流事業について、問題点らしいもの聞くことはできなかった。これは、前述の通り、同省ではこうした問題についての基本的姿勢さえ明確になっていないからに他ならない。他方、文化省では、SAARC 域外への文化使節団の派遣について、2000～2001年度には日本、韓国、オーストラリア、エジプト、イタリアの諸国に受け入れを要請中であり、すでに韓国、オーストラリア、エジプトからは受諾の回答を得ているが、他はまだであるとの前振りの後に、特に日本の場合にはヴィザの取得が難しく、それが文化交流事業にとって大きな障害となっているので善処してほしい旨、強く要望をされたことを付記しておく。た

だし、ヴィザの取得問題が解決されれば文化交流が促進するとは一概に言えそうもない。その理由は、以下の民間関係者の意見を見ればある程度明らかになるであろう。

(2) 民間関係者の見方

民間関係者のうち、特に厳しい見方を示したのは、ジャーナリストと音楽関係者であり、映画関係者はより具体的な要望を示した。

(a) 概略：ジャーナリストの話から

最近の SAARC 諸国域内文化交流の現状についてだが、そもそもその種の交流は極めて少ない、とのこと。インドとの間にはある程度の交流が認められるが、それ以外の諸国との間には言及に値するほどの交流はない。こうした現状は望ましいものではなく、本来は多国間の交流が求められるのだが、今のところそうした可能性は極めて低いと捉えているそうである。その理由としては、SAARC 諸国間の政治的問題の現状、とりわけインドとパキスタンとの間の対立関係と、各国の文化的側面への無関心の 2 点が挙げられた。

もう一つ問題なのは、インドとの間の交流がある程度認められるとは言え、その流れは圧倒的にインドからバングラデシュへの「一方通行」になっている現状である、という。なぜそうなっているのか、理由は大きく分けて二つある、とする。第一に、インドは多言語国家であり、それぞれの言語で多様な演目や番組が製作されていて、バングラデシュには、その全てが入ってくる。他方、バングラデシュの作品は全てベンガル語であり、数に限りがあるだけでなく、インドへ向けて送り出される作品の通用する範囲は西ベンガル州を中心にしたベンガル語通用地域にほぼ限定される、というのである。もう一つの問題は、政府の文化交流事業に対する投資の不足だという。政府の振興策がない限りこの種の事業の進展は望めないが、バングラデシュの官僚の問題があり（前述の、一切何もしようとしない官僚の態度のこと）、大した改善は見込めないと

の見方であった。では、外国からの支援が入れば問題は解決するのかと言えば、それは必ずしもそうは言えないだろう、とのこと。自分たちの得になることはほとんど何もないために、支援が入っても官僚達は手続きに入るのを嫌うことが予想されるからだという。ここでも官僚の問題が大きなネックになっているようである。

(b) 音楽関係者の指摘

インドからバングラデシュへの一方通行と言う問題で、最も厳しい指摘をしたのは音楽関係者である。問題の根本は多少なりとも「海賊版」の横行に関係するようである。

彼の指摘によれば、国外からのカセット、CDが多数入りこみ、その海賊版が廉価で販売されるから、バングラデシュの歌手・音楽家たちの作品は微々たる数しか売れない、という。しかし、実際のところ、バングラデシュでカセットやCDを出す有名歌手・音楽家は困っていない。なぜなら、彼らは元々かなり裕福な層の出身であり、おまけにコンサートやTV・ラジオの出演などもあるから、カセットやCDが売れなくとも大して困らないのだそう。バングラデシュがコピー天国であるのは周辺国にも知れ渡っており、現に聞き取り調査当日にもパキスタンの有名某レコード会社の人々が事情を調べに来ていた。もちろんこうした状態ではインドも困るはずだが、人口が10億人もいるから、少々のは気にならないのだろう、とのこと。

当然、彼のほうでも対応策を取ろうとするものの、全てうまくいっていないようである。まず、バングラデシュのアーティストをインドの会社に売り込もうとしたが、ほとんど成功しなかった。理由は明らかで、インドの方が多様なアーティストを多数抱えている上に、同じベンガル語圏の西ベンガル州があるから、ベンガルのアーティストに限定してもインドでは全く不足していないからだという。他方、国内の音楽業界の現状を改善すべきとして、記者会見を開いたり政府関係当局に対し著作権関係の法の制定・施行を求めてみたが、全く反応がないどころか、そ

の直後に脅迫を受けてしまったとのこと。せめて税制上の規制等を導入すべきであるとも主張したが、全く反応がないという。このような状態なので、バングラデシュのマーケットは今後とも当分インドの独占状態が続くだろうから、文化「交流」など遠い話した、とは彼の締めくくりの言葉であった。

(c) 映画関係者の指摘

まずバングラデシュ映画関係者の技術レベルが低いことが問題だ、とのこと。インドなどに行き、トレーニングを実地で受ける機会があれば、それは今後のバングラデシュ映画界発展のために非常に重要な貢献となるだろう。そのための機会が必要だ、という。また、字幕や翻訳の制約がある、との指摘もあった。バングラデシュにも少数だが良い作品があるが、それを海外で上映するには、翻訳や字幕作成ないし吹き替えが必要で、多大な費用が必要である。しかし、バングラデシュ政府にはそうした資金を負担する余裕はない。相手側からの招待で翻訳や字幕作成費用が提供されると、もっとバングラデシュからも諸外国に文化交流が促進できる、というのである。さらに、今回の映画祭に触れ、残念なことに今回は1回限りだったが、定期的に、少なくとも年に1回程度の国際映画祭があれば、それによってバングラデシュの一般観客も映画関係者も国際的な映画文化に触れる大きな機会を得られる、という。そのために現在とりあえず「(バングラデシュ) アジア映画祭」の定期的開催可能性を検討し始めている、とのことであった。

4. バングラデシュにおける諸外国との文化交流の現状：

文化センターの活動を中心に

(1) 欧米を中心とした諸外国との文化交流の概況

ここでは各方面の話を総合して簡単にまとめる。欧米各国との文化交流は、アメリカ文化は映画や音楽等を通じてコマーシャル・ベースで入りこんでいるが、それを除くと交流は少ないようである。文化センターや文化

施設を保持しているイギリス、ドイツ、フランスは活発な活動をしているが、それ以外の国々との交流は稀なようである。また、交流とは言っても、ほとんど一方通行で、バングラデシュ側から文化を紹介する活動は極めて限定されているようだ。これは文化政策の欠如や官僚の問題に起因しており、相手国側からの特別の招待でもなければ進展は望めそうもない、というのがほぼ一致した意見であった。

他方、いわゆる中東イスラーム諸国との関係は、こと文化面に関する限り極めて希薄である。おそらく最大の理由は言葉の制約であろう。イスラーム教徒が圧倒的な多数を占めるとはいえ、バングラデシュは言語的にはサンスクリット系統のベンガル語を母語としている。そのため、ベンガル語圏は言うに及ばず、インドのヒンディー語やパキスタンのウルドゥー語も、バングラデシュの人々にとっては何となく了解可能であるようだ。また、英語は小学校から教えられているために、英語を媒体とする映画、テレビ番組、音楽等にもなじむのはそれほど困難ではない。ところが、アラビア語を中心とするイスラーム圏とは言語系統的にも全く異なるために、その地域の文化が入り込むことには大きな困難が伴う。その上、中東地域の場合、イスラームに関する活動については熱心であっても、文化面での交流にはほとんど熱意を示さない。結果的に、バングラデシュにおける中東イスラーム地域の存在感は、文化面ではほぼ無視してかまわない程度に留まっている。

(2) 西欧諸国文化センターの活動

2001年1月にダッカ市内各所の美術館やギャラリーにおいて共同で連続開催された「チョビ・メラ」(1st Festival of Photography in Asia)は、バングラデシュにおける最初にして最大規模の写真展であった。同写真展の主催者としては、「アリアンス・フランセーズ」、「ゲーテ・インスティテュート」、「ブリティッシュ・カウンシル」、「オランダ大使館」等の名前が、それぞれのロゴ入りで全てのパンフレット裏表紙に印刷・明示されていた。この例に限らず、これらの団体は、バングラデシュで行われる多数の文化事

業・文化交流事業においても有力なスポンサーとして登場し、同国の学生・知識人層にその名を周知されている。以下、個々の活動状況を具体的に概観してみたい。

(a) ブリティッシュ・カウンシル (BC)

初めに概要について⁶⁾。バングラデシュでの活動分野は多岐に渡っているが、昨年の活動の概要については、それを一瞥で理解できるよう、驚くことにすでに1月末の時点で前年の活動全体を概観する美しいパンフレットが出来あがっていた (“Creating Opportunity” というタイトルである)。また、隔月刊行で広報誌も発行している。日常行っている文化事業の大きな柱としては、語学教育、語学試験、留学・進学相談を中心に各種の相談受付、図書館活動等があるようだ。図書館はかなり豊富な蔵書とスペースを確保しており、コンピューターによる検索システムも導入済み。有料会員制度で図書の利用・貸し出しだけであれば年会費550タカ(調査時のレートでドル換算約10ドル、円換算では約1100円相当)、ビデオの利用も望めば年会費800タカである。蔵書の豊富さには目を見張るものがあり、バングラデシュでも有数の図書館だと自負している、とのこと。子供向けや青少年向けの図書も充実させており、イングリッシュ・ミディアムの学校に通う子供たちの会員も多い。ちなみに、Creating Opportunity から注目すべき点を若干ピックアップしてみると、約1万5千人に対し(語学)試験実施、5500人の図書館会員に12万冊以上の貸し出し、同会員の質問6000件に対応、300人のストリート・チルドレンを「子供と安全」ワークショップに招待等々。その規模があまりに大きいのに驚嘆せざるをえない。

他方、狭義の文化交流活動については、アート部門を設けている。責任者の話によると、アート部門は、映画、コンサート、演劇、科学展示等を担当するセクションとのこと。

6) 施設そのものについては、規模が大きすぎるので、あえて省略する。

映画は、これまで 16 mm フィルムと 35 mm フィルムの 2 種類の形態扱ってきたが、16 mm フィルムのコピーを入手するのが困難になって上映会を終了したのに伴い、35 mm フィルムの上映会には以前以上に力を入れて行くつもりとのこと。コンサートは、近年では「多文化のイギリス」(Multi-cultural UK)を強調するように企画しているそうである。イギリスの現状をより直接的に伝えるには、こうした企画を通じて行うほうが細かい説明をするよりもはるかに効果的だと考えているからだそう⁷⁾。演劇は喜劇、実験劇、大衆演劇、ワークショップ形式の演劇等々、多様な形態のものを開催しており、詩の朗読会等も行っている。展示会は、BC 独自に行うものもあるが、こちらのギャラリーとタイアップする形で作家を紹介し作品搬送を担当する部分を分担する形のものも多いそう⁸⁾。

例年、企画は変化するが、例えば次の会計年度には、3 種類の映画上映会(各地巡業)、科学展示会、演劇(各地巡業)、コンサート、ストリート・シアターを開催予定の他、映画製作者をイギリスに送る計画もしている、とのこと。このセクションは責任者を含めて専任が 2 人だけであるが、地方で巡業や開催をする場合には地元のローカル・パートナーに補助や広告を頼むという。彼らとは常々連絡を取っており、実際に支援を頼む場合には、必要経費を支給するだけでそれ以外の報酬は出していないが、地方での文化事業には関心が高いので、喜んで支援してくれているそうである。

7) 例えば、先日開催した“State of Bengal”コンサートの場合、リーダーのサムはバングラデシュ移民 2 世であり、インド出身の女性歌手、アメリカ出身のドラマー、イギリス人ギタリストがバンドを組んでいる。このようなバングラデシュ系イギリス人が加わっているバンドを中心に、注目すべきバンドを探して企画を組むようにしているが、これは本部の方針でもある。また、バンドの種類にもバラエティーを持たせるように工夫しているとのこと。

8) 最近では「チョビ・メラ」の一翼を担う形で、資金援助だけでなく、イギリスの作家の作品を展示する企画にも協力しており、その作家のシンポジウムを開く計画も進行中である、とのことであった。

分野を問わず、企画のほぼ全ては「学生」（専ら大学生，カレッジの学生，専門学校生等）と「若い専門職に就いている人々」を対象にしている，という。彼らが将来のバングラデシュ社会のリーダーになる人々であり，彼らに対して BC の存在と活動を印象付けておくことは，BC にとって，ひいてはイギリスの将来にとって，極めて重要なことだと認識しているからだ，とのこと。こうした観点から見て，文化芸術面での活動が果たす役割は極めて大きく，かつ重大だと考え，企画などにも細心の注意を払っているそうである。

「多文化のイギリス」（Multi-cultural UK）を強調する企画といい，対象の設定といい，極めて戦略的かつ明確なヴィジョンを持った姿勢には，思わず感嘆を覚えるほどである。

(b) ゲーテ・インスティテュート（GI）

非常に小ぢんまりとした施設で，参考になる点が多いので，あえて詳細を記す。建物は3階建てで，1階はレセプション，170人収容のホール，図書館，2階は展示会場と事務所，3階は主に語学教室，屋上はキャンティーンになっている。専任職員は12名，パート・タイム4名である。これには語学講師も含むが，ほとんどが現地職員であるとのこと。

ホールでは映画の上映や演劇，小コンサート，各種の公開セミナーを開催。映画会は毎月最低1回以上開催しており，上映週間として集中的に開催することもあるという。演劇はほぼ隔月開催で，地元の劇団の演劇を主催行事として開催。また，演劇の手法を学ばせる目的で，バングラデシュの演劇関係者をドイツに派遣研修することも毎年行っているそうである。コンサートは，バングラデシュの音楽家によるベンガル音楽，特に歌が中心で，これもほぼ隔月開催であるとのこと。これらの企画立案・準備は全て職員が行う。

図書館は有料の会員制。年会費は250タカ（ドル換算で5ドル弱，円換算で500円強相当）。ドイツ語図書も多いが，ドイツ語が出来ない人々の利用の便を考え，大半は英訳されたドイツの文学や研究関連図書であり，

一部はベンガル語訳図書もある。収蔵数は、数千冊から1万冊の間ではなかろうか、とのこと。図書館には、図書の他に、ドイツの日刊紙6紙、ドイツ語と英語の雑誌(週刊, 隔週刊, 月刊等の定期刊行物)70~80誌, 数百本のビデオがあり, 室内にあるビデオ・セットで自由に見ることが出来る。また, コンピューターもあり, ネット接続されているので, それも利用は自由だそうである。

展示会場では, 毎月ないし隔月程度の割合で, 写真展, 絵画展, 建築家の設計・模型展等々を開催している。ドイツ本国からの巡回展の場合もあるが, 現地のGI職員が企画立案した地元の作家たちの展示会が多い。この他, 年に1回, 外部の大きなホールを借り, ドイツ本国から主にクラシック音楽の演奏家たちを招いてコンサートを開催するとのこと。

これら主に自己施設を利用した主催行事の他に, 毎年バングラデシュ国内の多数の文化事業に共催者ないしスポンサーとして資金提供・関与しているそうである。

語学教室では, 初級から上級までクラス別に, 常時ドイツ語の語学教育を提供している。ただ, 近年ドイツ本国で不法入国・就労をめぐる問題が先鋭化し, ヴィザ発給が厳しく制限されるようになったために, バングラデシュでドイツ語を学ぼうとする人々の数が減少している。また, GI側もそうした傾向に対し, あえて語学教育の普及・強化を考えるつもりはないそうで, むしろ, 最近では意図的に語学から文化事業に重点を移し, そちらの側面での活動を強化しているとのこと。

屋上のキャンティーンは, 常時開放されていて, 誰でも入場利用できる。お茶とスナック類はセルフ・サービス(有料)で, 時には学生たちのパーティーに無料で貸し出すこともある。このようにして多くの人が入場・利用し, それによって多くの人にGIの活動が知られるようになれば, それは望ましいことだ, との話しであった。

広報・宣伝のために, 施設についての簡単なパンフレットの他, 各行事ごとのリーフレット, その月の開催行事を紹介するブックレットを作

成し、各所に直接ないし郵送で配布している。

施設・人員共にかなり小規模な中で、非常に効率的な運営をしていること、ドイツ語を押しつけず、むしろドイツ語からの英訳図書などを充実させて、より広い人々にアピールしようとする姿勢、それと対応して、語学よりも文化活動を重視しようとする姿勢などは、日本の文化広報活動の参考になりうるという印象を受けた。

(c) アリアンス・フランセーズ (AF)

AFの方向性は、上記2つの文化センターとは異なる点もあるようである。まず基本戦略が異なる。そもそもフランスは、バングラデシュに限らず、文化を外交の極めて重要な部分であると考えており、その表現として「文化外交」という言葉を使っているようだ。AFは、狭義の文化部門として、「文化外交」の一翼を担うことになる、という。

AFの仕事は大きく分けて3部門あるとのこと。第1に文化交流であり、第2にフランス語教育であり、第3に情報センターである。文化交流事業は、定期的なものとして、毎週金曜日の午前と夕方の2回開催される映画上映会、毎月1回以上の頻度で開かれる館内での展示会、毎月定例のコンサート、それに外部施設を利用して大規模に行われる展示会やコンサートが年に1～2回程度。語学教育は、正しいフランス語をより多くの人に学び、使用してもらうのが目的で、現在520名の受講者があり、初級から12段階のレベル別のクラスが延べ32クラスある。科学・技術情報センターでは、あらゆる種類のフランスについての情報を提供する。専任のフランス人スタッフが1名常駐し、現代フランスの科学・技術情報、社会・文化情報、留学案内などを行う他、フランスから専門家がバングラデシュを訪れるような場合には、彼らのためのコーディネイトもするし、彼らを囲んでバングラデシュの関連分野の専門家が交流するワークショップを企画したりもする、とのこと。

施設は3階建てで、1階には大小2つのホールと語学教室、カフェと事務室がある。2階には、図書室、オーディトリウム、テレビ室、語学

教室がある。図書室には、フランス語図書約7000冊、雑誌25誌、新聞5紙がある。特徴的なのは、図書のうち、児童向けの図書を入れてすぐのコーナーに配置していることと、その脇にコミックのコーナーを設けていることであろう。コミックも文化の重要な一分野であるとの認識から、特別にコーナーを設置しているそうである。また、図書室には、簡単だがマルチメディアのコーナーもあり、パソコン1台、ビデオ等を閲覧者に開放している。AFは会員制をとっており、会員になれば図書室でも何でも自由に利用できる。オーデトリウムでは、毎週金曜日に映画上映を行う他、現在はピアノ教室、テラコッタ教室、空手教室を開いている。テレビ室には、ソファと大画面テレビがあり、ここでは毎日夕方フランスの国営第5放送を見せしている。3階には、科学・技術情報センター、語学講師室、語学教室がある。また、屋外には小ステージがあり、不定期だがパフォーマンス、ダンス、演劇などが行われる。

施設の開館時間は午前9時から12時と午後5時から8時と変則的だが、午前中は学生や家庭に居る人々が専ら語学を学習するため、夕方は仕事を終えた人々が語学や行事に参加しやすいように、と配慮されて決定されたものだとのこと。平均的な来館者は、語学学習者を中心に平常でも最低200～250人、何らかの行事開催日や開催期間中は最低300～400人になるとのこと。スタッフは、フランス人が2人、ローカル・スタッフ12人で、多数の語学講師は別である。毎月広報のために小冊子を発行し、会員全員と関係諸機関に配布。内容は、語学教室のお知らせ、映画上映会で上映予定の映画の紹介、最近の活動紹介、各種教室の案内、新規配架図書・ビデオの紹介、等々。文章はフランス語中心だが、必要に応じてベンガル語の対訳を添えている。行事の際には、その他にプレス・リリースを行い、招待状を発行したり、ポスターを作成して掲示したりして周知に努めている、とのことであった。

担当者が、AFについて強調したいこととして、以下の2点を挙げた。

- ①ロケーション。ダッカの中でも町の中心にあり、ダッカ大学やその他

の教育機関からも近く、しかも主要道路沿いにある。この位置を占めることにより、多様な層の多数の人がこの施設を利用することが可能になっている、とのこと。②BC や GI とは異なり、AF は「フランコ・バングラデシ・オーガニゼーション」、つまり、フランスの人々とバングラデシュの人々が共同して文化事業を行うためのセンター、ということ。具体的には、ダッカ AF では10名から成る「エグゼクティヴ・コミティー」を設けているが、代表を除く9人はバングラデシュの人であり、この委員会でダッカ AF の基本的な活動方針が決められるとのこと。非常に徹底した姿勢には感心させられる。なお、現在 AF のウェブ・ページを作成中で、遅くとも1年以内には開設する運びになる、とのこと。ちなみに、AF は、バングラデシュ国内にはダッカとチッタゴンの2ヶ所にある。

5. バングラデシュにおける日本文化紹介事業の現状

(1) 日本大使館文化部の活動

施設としては、大使館に併設された（入り口は別）一室に図書が並び、複写機が1つ。閲覧・自習用の机がいくつか。部屋を入ったところに現地職員が常に1名以上いて、外来者の相談に対応している。利用者は1日平均15～20名程度。職員は、日本人大使館職員1名、専任現地職員3名、パート・タイム職員1名である。

主要な業務としては、国際交流基金関連の多用な活動が挙げられる。具体的には人物交流、日本語教育関連、日本研究関連、日本文化紹介等々⁹⁾。また、アドバイザーとしての活動があり、日本への留学希望者から寄せられる留学に関する様々な質問に対し、それに答え、かつアドバイスをを行う。文部省奨学金関連、各種の情報提供、アジアン・フェローシップ関連、日本への現地ジャーナリスト派遣、日本語普及のための協力、ビデオ・図書の貸し出し、大使館にある多目的ホールを利用した試験実施やスピーチ・コンテスト、映画上映会の開催等の行事主催、定期刊行物の送付、等々が

その他の主要業務だそうである。また、年に2・3回は日本から文化使節を招いて特別行事（コンサートや踊りの上演、人形展等）を開催する他、隔年だがダッカで開催されるアート・ビエンナーレへの協力もしている、とのこと。

日本語教育については、文化部は直接関与はしていない。しかし、以前からあるダッカ大学関連の日本語教育施設に加え、最近バングラデシュ国内では、日本留学経験者やJICAの研修経験者を中心に日本語教育の施設がいくつか設置されている。大使館文化部では、日本留学のためのパンフレットを作成しているが、その中にそれらの語学研修施設を列挙して情報提供することにより、間接的に日本語教育の普及を図っている。

(2) 現地での評価

こうした活動が一体どの程度まで現地で評価されているのか、代表的な声を拾ってみよう。現地のジャーナリストによれば、日本大使館等を通じて日本の文物が直接紹介されるのは良いことで、例えば、最近、日本人形の展示会があったが、あの種の紹介は今後も続けて欲しい、とのこと。ただし、問題は多い、とも言う。何よりもその種の催事が極めて少ないことが問題で、現状では、よほど日本文化に関心を持っている人以外、バングラデシュの一般の人々には何も知られていないと言っても過言ではない、との厳しい意見である。その理由は明らかで、他の国々のように拠点としての文化センターや施設を持たず、定期的に行われる事業もないためだ、と極めて明快な指摘だった。

表現はもう少し穏やかだが、映画関係者の意見も厳しい。日本大使館は、今回の映画祭のために参加作品を提供してくれたり、様々な協力を惜しまず、その点で感謝している、と一応の評価をしつつ、次のように続ける。ただし、一般的に言って日本大使館が何をしているのか、この国で日本映画

9) 詳細は毎年外務省本省に要約して報告されているが、ここでは省略する。

がどのような機会にどのような形で上映されているのか、全く知らない。映画関係者に招待状が来ないのだから、知りようがない。それでも、何かの機会に若干数上映されていることを知っているのは、検閲委員会の委員として毎日多数の映画を見ている中に少数だが日本映画も混ざっているためだ、とのこと。あれはどこでいつ上映しているのか、知っていたら教えて欲しい、とも言われた。また、日本は映画が盛んらしいが、日本に映画祭はあるのか。諸外国の映画祭は、全てではないにしてもその一部は、途上国の映画を上映するプログラムを別に組んであり、私たちバングラデシュの映画関係者も招待作品共々、それらの映画祭に招かれる。しかし、日本からそうした招待があったことはない、との指摘もあったことを申し添えておく。

「チョビ・メラ」の例でも明らかだが、西欧各国とは対照的に、この種の文化的催事に日本大使館の名を目にすることは稀である。わずかに国際交流基金提供の文化事業が、若干のエキゾティズム色を配した記事として新聞紙上に登場するに過ぎない。こうした状況が現地の人々の厳しい評価の一因ともなっているようである。

6. 日本政府及び現地日本大使館に望まれる文化交流への対応

(1) 日本大使館文化部現地職員の意見¹⁰⁾

現状では問題も多いようで、しかも問題は大から小まで多岐に渡る。それらを箇条書きにしてみよう。

①文化事業を独立した組織にする必要性あり。

②施設分離の必要性。現在は文化部が大使館の一部に併設されているため、セキュリティが優先され利用者には極めて敷居が高くなっている。

10) ここでは複数の現地職員の意見を筆者の責任で要約した。彼らは率直かつ真摯に話をしてくれたが、その内容はかなり厳しいものであった。しかし彼らは繰り返し、諸外国や日本人来訪者を含む利用者のため、ひいては日本のイメージアップのために、あえて言っていることを理解して欲しい、と述べていたことを付言しておく。

- ③地理的問題。ダッカ外れの高級住宅街にあるために、利用者にはアクセスが難しい。せめて文化部だけは別に市の中心部に移さないと、これ以上の利用者増加は見込めない。
- ④文化部の事業・活動を中心にPRの必要性。バングラデシュにおいて日本はドナー（援助供与国）のトップでありながら、多くの人にはほとんど物（車や電気製品）以外には知られていない。
- ⑤現地の様々な団体・組織との交流促進の必要性。
- ⑥現地向け定期刊行物の発行や、映画などの定期的開催を考える必要性。また、地元の各種行事への資金援助・共催も考慮のこと。
- ⑦情報機器の整備の必要性。利用者向けのコンピューターが一台もない。
- ⑧最低限のファシリティ整備は早急な課題。飲料水設備（ごく簡便なもの）さえ導入されていない。そのため長時間勉強したり調べものをしたりする利用者は、出入りの制約もあり、一杯の水さえ飲めない状態である。
- ⑨日本人大使館職員の任期が短いため、文化部の活動に継続性が欠ける問題。
- ⑩図書整備の必要性。あまりに貧弱であり、特に日本語の出版物からの英訳図書が大幅に不足している。雑誌、特に英文定期刊行物が2種を除き、ほぼ皆無に近い状態なのは問題。利用者が閲覧できるよう、定期的に展示できる定期刊行物が文化部独自に必要。日本語の新聞も同様。英字紙（ジャパン・タイムス等）導入も検討されたい。
- ⑪大学案内の不備。多くの利用者が日本の大学への留学を考えて情報入手目的で来館するが、個別の大学案内は15程度の大学のものしかない。これでは、あきらめて欧米へ留学志望先を振り替える人が今後一層増えてしまう。
- ⑫スペース不足。一室に図書を始め多くのものを押し込むため、否応なく雑然として、来館者が利用する意欲を失う。職員としても仕事に支障をきたしている。

(2) 現地での声

上記の現地職員の意見は、現地の一般の人々にもある程度共通するようだが、多くに見られたのが次のような意見であった。早急に大使館とは独立した文化センターないし文化施設を設ける必要がある。もし今すぐに大使館とは別組織のその種の施設が無理だというなら、団体でも個人でも良いから、こちらのローカル・パートナーを探し、それらの人々を通じて文化プログラムを行えば、大した費用もかからずにある程度の規模の活動ができるはずである。ごく一部だが日本文化に関心を持っている人々はいりし、日本に留学やトレーニングで行った経験がある人たちも多いから、彼らの中から適切なパートナーを探すことができれば、現在よりもずっと活発な活動になるはずではないのか、というのである。

具体的な要望を上げたのは映画関係者であった。日本への要望として、現在計画中の「アジア映画祭」への協力を求めたい、とのこと。また、日本の映画祭に参加できるように配慮してもらいたい、とも言う。また、バングラデシュでは娯楽映画中心なので、芸術性の高い映画や児童向けの映画を作りたくとも困難であるとして、何らかの日本の基金がそうした作品製作を支援することを求めた。さらに、映画関係者の技術向上のため日本でトレーニングを受けられる機会の提供、及び日本大使館ないし他の機関による日本映画の紹介の要望もあった。

(3) バングラデシュ及び SAARC 諸国への対応に関する提言

今回、バングラデシュ政府関係者、諸外国の文化センター関係者及び民間の文化交流事業関係者との聞き取り調査を終え、その中から得た感触を大まかにまとめておく。

他の SAARC 諸国の状況は別として、ことバングラデシュに関する限り、政府を通じた SAARC 諸国間での文化交流事業には明らかに限界がある。加盟諸国間の政治的問題に左右されるのみならず、バングラデシュ政府の、特に官僚の対応に大きな問題が潜んでいることがはっきりしており、仮に資

金を投入しても、望ましい結果が生まれるとは思えない。また、「南アジア文化センター」についても、その実現可能性、及び設置後の活用の具体的な在り方等について、さらなる検討が必要なようである。

他方、民間ないし半民間の関係者を通じた活動には、日本の関与が十分に可能であるように思える。具体的には、映画関係者が求める「映画祭」への資金面・技術面での協力、絵画展や写真展に代表される文化交流事業への参加及び資金協力、現地の文化・芸術団体の活動へのバックアップや、それらの団体が他の SAARC 諸国との間で行う交流活動への支援、等々であれば、すぐさま実現可能であり、なおかつ、その結果は十分実りあるものとなりそうである。また、日本で開催される映画祭や各種の展示会に招待の形でバングラデシュからの参加を求めることは、日本において知られることの少ないバングラデシュをアピールする良い場となるのと同時に、バングラデシュの関係者に日本文化及び社会の現状を知らせる絶好の機会となるのではなかろうか。

(4) 日本大使館文化部への提言：短期的に；中長期的に

日本大使館文化部の活動には、問題が多いようである。限られた人員で多くの事務作業をこなしており、予算やスペースでも限りがあることを考えれば、早急に大きな変更を加えることが難しいことは理解できなくもない。しかし、そうした限界を理解した上でもなお、直ちに手を着けられそうなことや、少々困難ではあっても早急に実現を検討すべき点があるのは確かである。

まず、大した資金や人員の必要もなく、今すぐ解決可能な問題としては以下の諸点を指摘できる。

- ①飲料水設備の配置。バングラデシュでは極めて安価に設置・維持が可能である。
- ②新聞・雑誌の配置。大使館の中には一種の保存資料として日本から新聞・雑誌が送付されてきているという。それを短期間（せいぜい数ヶ

月以内) だけ、先に公開用として文化部に回すことは出来るはずである。これならば、大使館内の手続きさえ変更すれば、今すぐ全く新規の資金を必要とすることなく実現可能である。

- ③大学案内の配置。全国で外国人留学生を受け入れている大学から英文の資料を収集し配置することは、費用を掛けなくともすぐに実現可能である。
- ④映画上映会の定期開催。毎月一回程度、定期的に日本映画の上映会を開催するのは、大使館内にある多目的ホールを利用し、ビデオ・テープを毎年10～12本程度揃えれば、大した経費を掛けずに実現可能ではないか。もちろん、場所の問題があるので多数の参加は見込めないが、木曜日の午後ないし金曜日（こちらの休日）あたりに時間を設定し、現地紙への広報を続ければ、徐々に観衆も集まるであろうし、少なくとも広報活動としては大きな意味があろう。現地紙への広報は、プレス・リリースの形を取って、現地職員の手によりこまめに接触を図れば、記事として無料で掲載されることも十分可能である。
- ⑤情報機器の整備。大幅な整備には資金と時間がかかる上に、現在の場所ではスペース面でも問題があるが、パソコン1台程度であれば、今すぐに配置が可能なのではないか。それをオン・ラインで結べば、日本の大学の留学情報などが利用者にはすぐさま入手可能になる。若干旧式であっても十分に用は足せるので、他の部署で使用済みの物などを当てれば、経費が大して掛かるとは思えない。
- ⑥英字図書・定期刊行物の配置。日本文学や日本研究の英文図書を徐々に揃えることは、若干経費が掛かるが、ぜひ必要である。少なくとも、JICA等の外務省関係、広くは政府関係機関が発行している英文定期刊行物であれば、その配布リストに在バングラデシュ日本大使館文化部の名を加えることにより、定期的な収集・拡充が可能ではないか。

中長期的には、多数の課題があるが、とりあえず以下の諸点を検討され

たい。

- ①文化部の町中への移転。文化部の活動を別組織化することは、機構改革等の問題が絡むので困難が予想されるが、少なくとも現在の場所では制約があまりにも多すぎる。その端的な表れは、現在の1日平均利用者数の少なさ(15~20名)である。大使館本体と一体のために出入りしづらいこと、地理的にもアクセスが難しいこと、この2点が重大な障害となっているのである。組織は今のままであっても、せめて文化部だけは町中に移転し、留学希望の学生や日本文化に興味を持つ若い専門職の人々に対する利便性を大幅に高めるべきである。もちろん、資金面での手当てが必要ではあるが、単独の建物ではなく市中心部のフラットを1室賃貸で借りる程度であれば、それほど大きな資金が必要だとは思えない。同時に、このことはスペース面で現在抱えている問題の解消にもつながる。
- ②文化活動への戦略的対応。不法就労問題などがあり、バングラデシュから日本へ来ようとする人々へのヴィザ発給は審査が厳しく、そのために日本語学習者も大幅な伸びは期待できそうもない。この状況はGIが抱えている問題とほぼ同じである。GIは、それに対して文化活動に比重を移すことによりバングラデシュ国内での認知を高めようと、戦略的な方針転換を行った。日本大使館文化部でも、全く同様の対応ではなくとも、類似の基本方策が検討されるべきではないか。
- ③広報の必要性。文化部に限らず、日本大使館の活動を積極的に広報・宣伝してゆくことが必要であろう。特に英字媒体に比べて一般の人の目につきやすいベンガル語媒体への広報は、是非とも必要である。
- ④現地の文化・芸術団体との協力。現地の文化・芸術団体の活動を側面から支援し、それらの団体と密接に関係を保つことで、現地の知識人階層への知名度は大幅に上昇する。また、同時にそのことにより、文化部が独自の事業を行う際にはそれらの団体の協力を期待できるはずである。

- ⑤現地向け定期刊行物の発行。限られた人々の間だけでなく、より広範な人々への浸透を図るには、やはり独自の定期刊行物が必要であろう。デスク・トップ印刷等の技術が進んだためと、現地での印刷・製本費用が安いために、ブックレット形式程度であれば、人手も費用もそれほど掛けずに実現可能なはずである。

聞き取り調査に協力をいただいた方々とその所属及び肩書き一覧（聞き取り当時）
Mr. Munsif Fayed Ahmed, Director General, SAARC Wing, Ministry of Foreign Affairs.
Mr. Farhad Rahman, Cultural Adviser, Ministry of Cultural Affairs.
Mr. Farid Ahmed, Senior Assistant Secretary, Ministry of Cultural Affairs.
Mr. Rabiul Islam Khan, Acting Director General, Shilpakala Academy.
Mr. Monjurul Ahsan Bulbul, News Editor, the Daily Jugantar & the News Anchor, Ekushey Television (ETV).
Ms. Kabori Sarwar, Film Artist, Chairperson of the Bangladesh International Film Festival 2001, Member of the National Film Censor Board.
Mr. Syed S. Ahmed, Chairman of Ganer Dali, Member of International Copyrights Association.
Ms. Riva Ganguly Das, Counsellor, High Commission of India, Dhaka.
Ms. Sangeeta Barua, Links Officer, The British Council, Dhaka.
Ms. Shampa Kaiser, Art Manager, The British Council, Dhaka.
Mr. Ashraf-uz-Zaman Sarker, Programme Officer, Goethe Institute, Dhaka.
Mr. Andre Raynouard, Conseiller de Cooperation et d'Action Culturelle, Ambassade de France; Director, Alliance Francaise de Dacca.
Mr. Christophe Steyer, Deputy Director, Cultural Affairs, Alliance Francaise de Dhaka.
Some local stuffs (anonymous) of the Cultural Section, Embassy of Japan, Dhaka.

参 考 文 献

- Bangladesh International Film Festival 2001*, Official Catalog, Festival Souvenir Committee, Dhaka.
Star Magazine, 2000年2月29日号。
Weekend Independent, 1999年10月22日号, 1999年11月19日号, 2000年6月17日号, 2000年9月15日号。

Cultural Exchange among the SAARC Countries : In the case of Bangladesh

TAKADA Mineo

0. Preface

This paper deals with the following topics; i.e. frame of the cultural exchange programs in Bangladesh, the present situation of the cultural exchange programs between Bangladesh and the other SAARC countries, the activities of the cultural centers of some Western countries, the present condition and the problems of the activities of cultural section of the Japanese Embassy in Bangladesh, etc. The report is mainly based on the interviews with the persons with concern, and is compiled with the additional sources and information. The list of interviewees is designated at the end of this paper. The author appreciates the kind cooperation of them.

1. Frame of the cultural exchange program in Bangladesh: With special reference to the relationship with the other SAARC countries.

1-1. The view of some government officials

The interviews with some persons of the ministries with concern, i.e. the Ministry of Foreign Affairs, Ministry of Cultural Affairs, and with some other persons with concern who belong to the other official institution reveals the following points.

- (a) It seems that the Government of Bangladesh has no general policy or principle on the cultural exchange programs as a whole.
- (b) The government concludes a pact on cultural exchange programs with

India, Pakistan, Nepal, Sri Lanka and Bhutan, but not yet with Maldives. Based on the pact, the government initiates some activities, but the present situation of such activities seems far from vital and the number of such activities is very limited.

- (c) Besides, the present condition of the cultural exchange between the private or semi-official sectors in Bangladesh and those in the other SAARC countries seems rather active.
- (d) There seems to be almost no discussion on the so-called "South Asian Cultural Center" project in the Government of Bangladesh and, on the contrary, some officials shows rather negative response on this matter. Moreover, it is very impressive that all the persons interviewed share the more or less similar recognition that the frame of SAARC itself is almost non-effective or out of function. And it is also very impressive at the same time that they show no eagerness to improve the situation, even limiting to the field of the cultural exchange alone.

1-2. The view of a journalist on this matter

A distinguished journalist working for one of the most famous papers in Bangladesh said that, as far as he knows, there is no general policy on the cultural affairs as a whole as well as on the cultural exchange program alone. This view coincides with the saying of some officials of the government. He guesses the reason of this situation as the lack of concern of the officials on this matter. Although he recognizes the urgent need of introduction of such a general policy on cultural affairs, he feels small possibility to realize such a policy in the near future, because of the total lack of concern of the government officials as well as of the policy makers on this matter.

2. Present state of affair of the cultural exchange between Bangladesh and the other SAARC countries.

2-1. The view of some officials

The Ministry of Foreign Affairs does not grasp the detail on this matter at all. The Ministry of Cultural Affairs grasps some of the cultural exchange programs. Following the data shown by the ministry personnel, 13 cultural groups visited the other SAARC countries from Bangladesh for last 5 years and, among these, 8 groups visited India alone. On the contrary, only 3 groups visited Bangladesh from the other SAARC countries. There were no visiting groups to Bangladesh in 1999 and 2000. This seems a result of the India-Pakistan nuclear crisis erupted in 1999.

The chief of the Silpakala Academy, an official cultural organization, expresses the view that it seems very difficult to develop the cultural exchange programs among the SAARC countries as the SAARC itself is almost ineffective. On the detail of the comes and goes of the cultural envoys, the official refused to declare the information further.

2-2. The views of the persons with concern in private or semi-official sectors

As far as we see the situation mentioned above, we cannot help to conclude that the present condition of the cultural exchange among SAARC countries is extremely inactive and poor one. Turning our eye to the private or semi-official sectors, however, a different image appears.

(a) general situation

The journalist roughly sketches the present situation of the cultural affairs as well as the cultural exchange in Bangladesh as follows. The

field of the theater or dramas is in good condition, because the quality of the play and of the actor / actress is rather high even comparing to the international level and because the cultural exchange in this field is moderately active. Then, the fields of dance and music follow, he said.

(b) Cinema

Following the saying of a central figure in Bangladesh cinema world, there is no special law on cinema in Bangladesh, but the government has formed a censor committee on the cinema and checks a possible harm to the society through that.

On January 2001, "the Bangladesh International Film Festival 2001", a first of such international festival in Bangladesh, was held. Although we appreciate the success of the Festival, it seems one-sided judgement on the present condition of cinema in Bangladesh to stress the success only. Though there are many cinema halls showing the entertainment Bangla-cinemas, such films are just an imitation of Hindi Cinema. Moreover, there are so many rental video shops around the country and they hold a lot more volumes of the video cassettes of Hindi Cinema comparing to the Bangla made ones. Such a great popularity of the Hindi Cinema in grass-root level is not negligible, if we think about the real condition of the cultural exchange in Bangladesh.

(b) TV

Presently, Bangladesh has 4 Bangla TVs, i.e. Bangladesh TV (BTV), Ekshey TV (ETV), Asia TV Network (ATN) and Channel-i. Among these, only national BTV is through the normal wave and the other 3 are the satellite channels. There are more 4 Bangla channels in India, but many of the viewers in Bangladesh favor the channels of Bangladesh. It

TAKADA Mineo: Cultural Exchange among the SAARC Countries :
In the case of Bangladesh

is perhaps because of the difference among dialects as well as of the difference of religion. From the view-point of cultural exchange, we should pay attention to the effect of Hindi channel, because of the great popularity of the Hindi Cinema broadcast through the channel.

(c) Music

It emerges very gruesome picture in the music scene, contrary to the saying of the journalist. Except classical music field, a very small part of the total music world, the most popular and accessible way to hear the music for the ordinary people is though Music Cassette Tapes or CDs. As there is no law on the copyrights of the music in Bangladesh, however, so-called "pirate" tapes and CDs, especially of the Indian music, flood almost all of the music shops in Bangladesh and they make to appear a kind of "cultural monopoly" situation in Bangladesh.

(e) Dance

A well-informed person on this field said as follows. There are mainly 2 types of dance in Bangladesh, i.e. classical dance and Bengali-dance. But, classical dance is just a follower of the Indian ones. And, on the other hand, Bengali-dance is a mixed-up of a bad copy of classical dance with the traditional native dance, and that is far from the art. Both of these seem very difficult to attract the wide audience especially outside Bangladesh, the person said.

2-3. The activities of High Commission of India (HI) in Bangladesh

The presence of India in the cultural spheres is very powerful and overwhelming in Bangladesh, especially in the private sector and in the field of

popular culture. In addition to it, HI plays a great role in the field of so-called high culture.

Following the saying of spokes person in HI, India lays special importance on the cultural exchange activities in Bangladesh, as the state of West Bengal and its neighboring area share the similar cultural and linguistic background with Bangladesh. HI offers average 10 cultural programs performed by the visiting groups from India in every year such as dance, music, etc. In addition to those, there are so many Indian cultural groups visiting Bangladesh by the invitation of the different cultural or art groups in Bangladesh.

HI runs a "Cultural Center" and an auditorium in Dhaka. The center has a library that holds about 20000 books, a reading room, an art gallery and a small auditorium and everyone can freely visit this center. Except that, the auditorium nearby the office of HI offer about 15 film shows per month. HI publishes a monthly magazine, but it is rather difficult to publish any pamphlet for announcing such activities because of the limitation of the budget and stuffs, the person said.

3. Problems of the cultural exchange between Bangladesh and the other SAARC countries.

Some government officials mentioned the difficulty on the acquisition of visa as a main factor to obstacle the cultural exchange. Although it is true in some sense, there seems to be more serious problems on this matter.

A well-informed journalist says that there are two main problems concerning this matter. 1) The number of the cultural exchange programs among SAARC countries is too small to appreciate. 2) Though we can observe some activities of cultural exchange between Bangladesh and India, the flow of communication is almost one-sided, from India to Bangladesh only.

TAKADA Mineo: Cultural Exchange among the SAARC Countries :
In the case of Bangladesh

Unfortunately, there seems very small possibility to improve this situation, mainly because of the lack of concern of the government officials and politicians.

Except these, a person of music world points out the "pirates" problem as one of the main cause to emerge such a "one-sided" flow of information. A person who belongs to the cinema world points out that the lack of sufficient training for the engineers in this field and the lack of capital to make quality-works are the main obstacles.

4. The present state of affair of cultural exchange between Bangladesh and some foreign countries other than SAARC

4-1. General situation

Concerning to relation with USA, the commercial-based cultural exchange is the main form, such as cinema, music etc. There are more or less satisfactory relations with those countries that have "cultural center" in Bangladesh, such as UK, German or France, but except those, there is almost no communication with the others in the field of cultural exchange. Though Bangladesh is a Muslim dominated country, there is no worth mentioning relation with the so-called Middle Eastern Islamic countries on this matter, mainly because of the great difference of the language and of the lack of concern on cultural field on the side of those countries.

4-2. Activities of some Western cultural centers

"Cchobi Mela", 1st Festival of Photography in Asia, has held in Dhaka on January 2001 and this is certainly first and the most big event of such a kind in Bangladesh. Many foreign cultural institutions took part in this festival as a sponsor, those includes the British Council, Goethe Institute, Alliance

Francaise, etc. Not only in this example, but also in the case of so many other cultural events in Bangladesh, we can find their name on the back page of pamphlets or in the news reports of mass media. Many people who belong to the highly educated part of the society or to the urban middle class knows their names and activities well. The author sketches the activities of those three institutions mentioned above. (See Japanese text in detail)

5. Present state of affair of the introduction of Japanese culture in Bangladesh

5-1. The activities of Cultural Section of the Japanese Embassy in Bangladesh

The section deals with so many kind of works; concerning voluminous work relating to the Japan Foundation, consulting work for the Bangladeshi students who want to study in Japan, the works relating to the stipend of the Japanese Ministry of Education or the Asian Fellowship, holding a Japanese Speech contest in Dhaka, etc. In addition to these, the section also offers some special events 2 or 3 times per year, such as, cultural exhibitions, concerts performed by the cultural envoys from Japan, etc. Besides, this section collaborates with some Japanese language institutions in Bangladesh for the purpose of promoting Japanese. To accomplish such a vast variety of works, it seems that the stuff working for this section is too small in number, i.e. 1 Japanese (full-time), 4 Bangladeshis (3 full-time and 1 part-time).

5-2. Some short comments on the activities of Japanese embassy by Bangladeshis

Appreciating the cultural event offered by the cultural section in some degree, a Bangladeshi journalist points out a great deficit of the activities of

the section. That is, the program offered by the section is too small in number. In reality, except in the case of very rare and maniac Japanese lovers, there are almost no persons in Bangladesh who know the Japanese culture. The main reason for such a state of affair is clear; Japan has no cultural center or such a kind of institution in Bangladesh.

Similarly, although showing their appreciation for the kind assisting of the cultural section to make success the Cinema Festival, a person relating to the cinema world also points out the limit of the activities of the section. She said that, generally speaking, they, she or almost all of the Bangladeshi, know nothing about the activities of the cultural section. Moreover, she and the person of cinema world get no information about the Japanese film show in this country, though she know the fact that such a kind of shows is certainly held in some occasion somewhere in this country because she watch Japanese films as a censorship member.

6. A short conclusion with some recommendations

6-1. On the possibility of cultural exchange in Bangladesh

As far as we concern on the present situation in Bangladesh, it seems very difficult to assist or to promote the cultural exchange with the other SAARC countries through the government offices. We must certainly recognize a great and everlasting possibility to erupt political argument or crisis among the countries, especially between India and Pakistan. Moreover, as the bureaucratic system in Bangladesh is the mal-functioned and ineffective one beyond our imagination, it seems to be almost no possibility to yield a positive result even if the Japanese government offer a financial assistance on this field. Concerning the establishment of "South Asian Cultural Center", the Japanese government should be very cautious about its feasibility, the author feels.

On the contrary, we see moderate possibility to help and to part in the cultural exchange in the private or semi-official sectors. To put it in concrete, it seems possible for Japan to play a positive role in the following examples, and that kind of activities will soon bear fruit in some degree. Those are, financial and technical assistance to hold a cinema festival, same kind of assistance for some cultural programs such as the photo exhibitions or art exhibitions, offering support to the cultural or art groups in Bangladesh, offering support to the cultural exchange programs held by such kind of groups, etc. At the same time, offering formal invitation for the Bangladesh groups or individuals to attend a cinema festival or an exhibition in Japan will be good opportunity to introduce the modern culture of Bangladesh. And, to do so, the attendants will bring back the live information on contemporary Japanese culture and society to Bangladesh.

6-2. On the activities of Cultural Section of the Japanese Embassy in Bangladesh

Although we recognize their limitation, such as too much work, shortage of stuffs and budget, limit of space etc., we cannot help to point out some problems concerning the activities of the section. Instead to pointing out the problems, however, the author recommend some improvement of the form and activities of the section.

(a) Recommendation for improvement for a short term

- 1) Provide drinking water in the room of cultural section for the visitors.
- 2) Distributing some newspapers and periodicals in the room.
- 3) Distributing the English information books or guides published from the Japanese universities in the room.
- 4) Arranging to offer Japanese film shows in multi purpose hall in the

TAKADA Mineo: Cultural Exchange among the SAARC Countries :
In the case of Bangladesh

embassy periodically.

- 5) Installing PCs, at least one PC, for the visitors in the room urgently.
- 6) Distributing English books (translated from Japanese) and English periodicals in the room, even if not soon, but gradually.

(b) Recommendation for a middle or long term

- 1) Sift of location of the cultural section to the downtown area.
- 2) Coping with the situation of cultural activities strategically.
- 3) Necessity of publicity, especially for the announcement on the cultural activities.
- 4) Cooperation with the domestic cultural or art groups.
- 5) Publishing a periodical for the Bangladeshi (in English or in Bengali if possible).

The List of Interviewees (not in order)

Mr. Munsif Fayed Ahmed, Director General, SAARC Wing, Ministry of Foreign Affairs.

Mr. Farhad Rahman, Cultural Adviser, Ministry of Cultural Affairs.

Mr. Farid Ahmed, Senior Assistant Secretary, Ministry of Cultural Affairs.

Mr. Rabiul Islam Khan, Acting Director General, Shilpakala Academy.

Mr. Monjurul Ahsan Bulbul, News Editor, the Daily Jugantar & the News Anchor, Ekushey Television (ETV).

Ms. Kabori Sarwar, Film Artist, Chairperson of the Bangladesh International Film Festival 2001, Member of the National Film Censor Board.

Mr. Syed S. Ahmed, Chairman of Ganer Dali, Member of International Copyrights Association.

Ms. Riva Ganguly Das, Counsellor, High Commission of India, Dhaka.

Ms. Sangeeta Barua, Links Officer, The British Council, Dhaka.

Ms. Shampa Kaiser, Art Manager, The British Council, Dhaka.

Mr. Ashraf-uz-Zaman Sarker, Programme Officer, Goethe Institute, Dhaka.

Mr. Andre Raynouard, Conseiller de Cooperation et d'Action Culturelle, Ambassade de France; Director, Alliance Francaise de Dacca.

Mr. Christophe Steyer, Deputy Director, Cultural Affairs, Alliance Francaise de Dhaka.

Some local stuffs (anonymous) of the Cultural Section, Embassy of Japan, Dhaka.

References

Bangladesh International Film Festival 2001, Official Catalog, Festival Souvenir Committee, Dhaka.

Star Magazine, 29/02/2000.

Weekend Independent, 22/10/1999, 19/11/1999, 17/06/2000, 15/09/2000.